

ロシア人は男尊女卑的か

——サンクト・ペテルブルグにおける調査から——

五十嵐徳子

1. はじめに
2. 「男尊女卑」という国民性の自己認識
3. ジェンダーイメージ
4. 面接調査に見る「男尊女卑」観
5. おわりに

キーワード：男尊女卑・国民性・ジェンダー

1. はじめに

一般に、ロシアでは、旧ソ連時代に男女平等が達成され、日本などに比して女性の社会進出が当然であるとされてきた。しかし、ポスト社会主義のもとでこの獲得された労働の場が失なわれつつある。筆者は、ロシア人の国民性と社会意識について研究し⁽¹⁾、実際にロシア社会で生活する間に「ポスト社会主義時代に女性が労働の場を失うということの根底には、ロシアは男女平等ではなく、むしろ男尊女卑的な要素さえ見られるのではないか」と感じるようになった。その疑問を少しでも解明するために、かなり乱暴な方法ではあるが社会調査の中からそれを検証し、また条件は異なるが日本とのデータ

の比較を行った。

ここで使用するデータは、1994年春季に行ったロシア人の社会意識調査⁽²⁾とその補充調査、および面接調査をもとにしている。補充調査は、1994年7月～8月にペテルブルグ市で実施した。調査は18才以上の男女700人を対象に、31項目の部分調査票の配票調査法で行った。有効回答数は483人（有効回答率69%）、その内訳は男子206人、女子276人であった。この補充調査の一部の項目については、日本でも比較のために調査を行った。調査実施日は1994年9月～10月で、調査地は大阪府、東京都、長野県、18才以上の男女500人を対象に副次抽出法により実施した。実施方法は、30項目の部分調査票による配票調査法である。なお、有効回答数は、384人（有効回答率76.8%）で、その内訳は男子159人、女子225人であった。この日本における補充調査については、筆者の友人・知人など23人が（大阪10地点、東京8地点、長野県5地点）、それぞれ近隣の者から無作為に抽出したサンプルを対象に実施した。また、面接調査は、1994年3月～4月に50人に対して行ったが、本テーマに関しては、16人のデータを使用している。

(1)これに関しては、拙稿五十嵐（1997）を参照のこと。
(2)1994年春調査については、拙稿五十嵐（1996b、73-82頁）に詳しいのでここでは割愛する。また、この調

査結果に関しては、拙稿五十嵐（1995、99-105頁）、拙稿五十嵐（1996a、博士論文）等に詳しい。

表1 国民性に関する自己意識（複数回答）（％）

項 目	存在を認めた者の比率
忍耐強さ	66
相互扶助	25
妬み心	5
民族的自負心	5
男尊女卑	2
権威主義的	7
勤勉でない	13
正教以外排除	2

2. 「男尊女卑」という国民性の自己認識

ロシア人自身が、「男尊女卑」をロシア人の国民性で見なしているかどうかについて、見てみる。

ロシア人の特質として次のようなものがあげられています。あなたはどれが最も適合していると思いますか（複数回答可）

- A：忍耐強い
- B：助け合いの精神が強い
- C：どちらかという他人の幸福をあまり喜ばない傾向がある
- D：スラブとしての民族的自負心が強い
- E：男尊女卑の風習が根強い
- F：強いものに憧れる
- G：あまり勤勉でない
- H：善悪を問わず状況に適応しやすい
- I：ロシア正教以外の宗教をあまり認めたがらない
- J：その他
- K：わからない

全体の2％が自己認識で「男尊女卑」を選択している（複数解答の構成比）。他の項目に比べてかなり低い値が出ている。これは否定的な意味合いが含まれている国民性に関しては、選択したがないという当然の結果かもしれない。

自らの自己認識でこれを選択しているものは少ないが、補充調査の結果をみると、この傾向は強いと言える。しかし、その内容には、複雑な要素が含まれている。

3. ジェンダーイメージ

補充調査の二者択一問題で、「男性の威厳・男性の優しさ」、「女性の社会進出・女性の家事尊重」、「男性の社会奉仕・男性の家庭奉仕」、「女性の貞淑さ・女性の行動力」を選んでもらった結果が以下である。

表2に見られる通り、補充調査の二者択一問題「男性威厳・男性の優しさ」「女性の社会進出・女性の家事尊重」「男性の社会奉仕・男性の家庭奉仕」「女性の貞淑さ・女性の行動力」のいずれの項目でも、我々の観念では、「男尊女卑」的な傾向を示しているように思われる。この傾向は、男尊女卑あるいは男女差別が根強いとされている日本に比べても、著しいと言える。しかし、次のグラフ（クロス表の構成比の日ロ比較：図1, 2, 3）の内容とも考え合わせて見ると、事態はそれほど単純ではない。

ここでは、女性の社会進出というカテゴリーを、女性の地位の向上、男女差別からの解放のプロセスであると仮定するならば、確かに、日本では、女性の62％、男性でも43％がそれを望んでいるのに対して、ロシアでは男女ともそれ

表2 日本人・ロシア人の意識対比（上段・下段比較）（％）

性別等 タテゴリ	男 性		女 性		全 体	
	ロシア	日 本	ロシア	日 本	ロシア	日 本
男性の威厳	52	47	45	24	48	34
男性の優しさ	25	48	34	69	30	61
女性の社会進出	18	43	40	62	31	54
女性の家事尊重	60	54	44	32	51	42
男性の社会奉仕	36	64	30	50	32	56
男性の家庭奉仕	44	33	54	42	50	38
女性の貞淑さ	61	51	46	25	52	36
女性の行動力	18	44	35	69	28	58

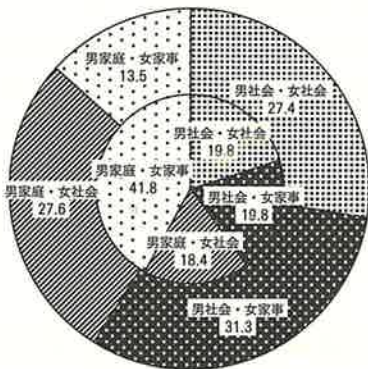


図1 社会と家庭（日ロ比較）（全体）

外円
（日本）
内円
（ロシア）

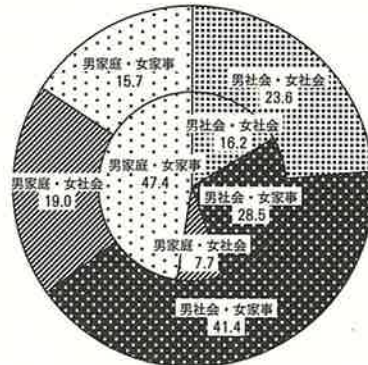


図2 社会と家庭（日ロ比較）（男性）

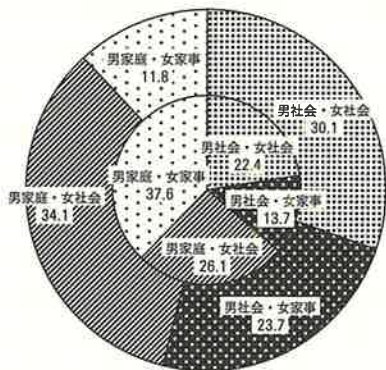


図3 社会と家庭（日ロ比較）（女性）

を望む者が少なく、後退的な印象を受ける。よく知られているように、ロシアの女性の就業率

は極めて高く（医師の75%が女性である⁽³⁾）、職務上の地位、給与面の男性との格差は存在す

るものの、当初の社会主義政権の家庭観（家庭は搾取の温床であり、女性の解放のためには家庭の地位を引き下げなければならないという）と労働力不足、男性の給与だけでは生活が困難であるという経済的理由から、女性の社会進出は実現していたのである。従って、ここに見られるロシア人の「女性の社会進出」に対する消極性は、こういった背景を考慮して、検討されなければならない。

この点では、日本の女性が、近年になって、パートなどの不完全就労が多いものの、ようやく社会進出に関心を抱きはじめ、経済的理由からも、その傾向がますます強まっていることと対照的な状況にある。すなわち、ロシアでは女性の社会的進出という公的な面では、日本より進んでおり、問題は別のところにあるように思われる。これは、ロシア人の家庭重視が必ずしも個人主義の表われでなく、家庭の価値が確立しておらず高学歴者を中心にその要求が強いこと、家事が女性の「第2の勤務時間」⁽⁴⁾と呼ばれているように、女性の大きな負担になっていることなど、むしろ広範な私的な領域に存在すると考えられる。これが、女性の意識にも根強いことは、後に見る面接調査でも明らかである。グラフから、ロシア人が選択する最も多いパターンが、「男性の家庭奉仕・女性の家事専念」（男女とも）であることが分る。

ハーバード・プロジェクトの研究では、貧困者ほど家庭を重視する傾向があると推測しているが⁽⁵⁾、本調査では、高学歴者ほど心の支えとして家庭を選択する傾向が強い（高等教育71%、中等以下57%）⁽⁵⁾。また、本調査で、心の支え

表3 心の支えと未婚既婚の比較（男女別）%

区分	男性		女性	
	未婚	既婚	未婚	既婚
家庭選択	36	76	60	83
その他	77	24	40	17

として家庭を選択する者は、既婚者の男性において著増し、夫の妻への依存が、特に強いことを示している。これは、上述の「第2の勤務時間」の実態を反映しているものと思われる。

（表3：男性、Q=0.74、女性、Q=0.53）

日本人の傾向について触れておくと、グラフから明らかのように、女性自身の社会進出への意欲が強く、それを実現させるためには男性の家庭奉仕が不可欠であると考えられる傾向にあるのに対して、男性では、男性が社会・女性が家事という傾向が極めて強く、男性が女性の社会進出に否定的な考えを抱いている⁽⁶⁾。

4. 面接調査に見る「男尊女卑」観

「男尊女卑」に関して面接調査を紹介しておく。男女16人（男性3人、女性13人）に面接調査を行ったが、そこで明らかになったことは、男性は、予想通り「男尊女卑は存在し、当たり前のことである」と答えており、女性の場合は、年齢によって次の3つのパターンに分れる。

①旧ソ連、そして現在のロシアにおいて男尊女卑ということは存在せず、特に、ソ連においては、完全に男女が平等で、一度も差別や不都合を感じたことがないとする女性（13人中4人）。彼女らの年齢は、1人（40才）を除けば

(3) こうしたロシア（ソ連）における、女性の社会進出の状況とそれが含む諸問題については、P. ホランダール 1977 (221頁)、およびインケレス、ヴァウアー 1963 (247頁～) 参照のこと。

(4) ホランダール、前掲書、224頁

(5) インケレス他、前掲書、249頁

(6) NHK世論調査部のデータを時系列的に見ると、男性の意識も徐々に変わりつつある。

55才以上で、元共産党員であり、ロシアの年金受給年齢に達していながら、現在も仕事を続けている。職場は、職安、図書館、大学で、高学歴者である。また、何のためらいもなく、家庭の仕事は女性がするものと思っている。この人たちはロシア人女性というよりは、ソ連女性というような感じのする人たちである。

②男尊女卑は過去も現在も存在する。家庭の中では、家事は女性の仕事であり、これを男性に押しつけることは間違っている。家のことは女性がすべきである。従って、女性はパートタイムぐらいの仕事で十分で、今までのソ連女性のように働きたくない。このタイプの女性は、7人で、そのうち2人は比較的高齢であるが、残りの5人は30才以下と若い。現在は専業主婦、あるいは失業中であり、この先も常勤の職に就くことを望まない人々である。

③男尊女卑は過去も現在も存在する。仕事面においても、男女平等は建て前にすぎず、実際には男性優位の社会である。また、同様に、家庭の中でも、家事は女性の仕事だと決めている。これからは、家事も分担すべきであるが、現在のロシアの経済的・政治的状况ではそれどころではなく、遠い将来のことになると考えている。このような意見の女性は2人だけである。その他、男尊女卑に関して特別の意見を持っていない者が1人であった。

以上の面接調査の結果では、大半の女性が男尊女卑が存在することは認めており、2人が、家庭の中での平等を希望している。大半の人々は、何の疑いもなく、家事は女性の仕事だと思っ

ているか、あるいは思っていないか、自分よりは夫の昇進を望むか、それが女性の運命だと感じているようである。

5. おわりに

以上のことから見て、ロシア人の国民性として、「男尊女卑」の傾向が認められるかという問題であるが、最大の問題は、男性はもとより、女性自身が、男尊女卑にあまり抵抗感を抱いていないのではないかということである。従って、ロシア人に、こうした傾向は強く存在することは否定できない。ただ、ここでは、日本人と比べて、それが、特にロシア人に固有の特性であるとは断定できないと言うべきであろう。

しかし、男性はともかくとしても、ロシア人女性の意識の中に男女平等という意識が非常に弱く、男性のみならず、女性自身の意識改革が強く望まれる⁽⁷⁾。

主要参考文献

- 五十嵐徳子、1995「体制移行下のロシア人の社会意識の現状について—社会意識調査の結果をもとに—」『ロシア・東欧学会年報』第23号
- 五十嵐徳子、1996a『体制移行期におけるロシア人の社会意識の考察—1994年実施の社会意識調査の結果をもとに—』博士論文（大阪大学大学院言語文化研究科）
- 五十嵐徳子、1996b「ロシア人の社会意識の地域特性について」『東アジア研究』第14号、大阪経済法科大学アジア研究所
- 五十嵐徳子、1997「文献に見るロシア人の国民

(7)ポスト社会主義時代のロシア人の労働と家庭に関する意識を分析したものに、拙稿「ロシア人女性の労働と家庭に関する意識状況—サンクト・ペテルブルグで

の調査を中心に—」『ロシア・東欧学会年報』第26号（平成10年12月発行予定）がある。

性と社会意識の調査結果」『ロシア・東欧学
会年報』第25号

NHK世論調査部編、1992『現代日本人の意識
構造』第3版、日本放送出版協会

ホランダー・P（寺谷弘壬他訳）、1977『アメ

リカ人とソビエト人』紀伊国屋書店

Inkelex, A., Bauer, R., *The Soviet Citizen*
(Cambridge, 1959).

インケレス、ヴァウアー（生田正輝訳）、1963
『ソヴェト市民』慶応大学法学研究会